

# ブータンミュージアム通信

vol. 19

## ■目次

- P 2 6周年記念講演会 報告  
「博物館」から「博情報館」へ  
国立民族学博物館名誉教授 栗田靖之  
ブータンの国づくりに思う  
(一材) 日本開発構想研究所研究主幹 梅田勝也
- P 5 映画「ゲンボとタシの夢見るブータン」  
について  
ブータンミュージアム賛助会員：奥村 陽子  
ドキュメンタリー映画 「The Next Guardian」  
について  
ソナム・チョキ
- P 8 高野翔氏への取材記事  
月刊ウララ 2018年11月号より転載
- P 12 最近のクエンセルの記事からーそのV  
ブータンミュージアム 奥村彰二
- P 17 第14回おしゃべりサロン開催レポート  
ブータンミュージアム事務局
- P 20 ブータンの一口メモ ラヤッパの帽子  
ブータンミュージアム事務局
- P 22 アジアの村を歩く⑩ 松田宗一
- P 24 編集後記 ブータンミュージアム 河崎英代



## 6周年記念講演会 報告

### 「博物館」から「博情報館」へ

2018年11月11日

国立民族学博物館名誉教授 栗田靖之

博物館の魅力は、なんといっても本物のモノが持つ魅力である。宝物拝観の場、「テンブルとしての博物館」としてだけでなく、展示をめぐる対話をする場としての「フォーラム型の博物館」になる必要がある。

ブータン文化を例にとると、今までは、展示する側が「私はブータンをこのように見ている」という展示であった。しかしこれからの博物館は「展示する側」の見解のほかに、世界がグローバル化した結果、ブータンの人々が「我々の文化や社会をこのように見て欲しい」という「展示される側」の意見が加わる。それと同時に、その展示を見た観客が「ブータンではどうしてこのようなものを用いるのか、これにはどのような意味があるのだろうか」という疑問に答える場を提供することが必要となる。

それらの疑問に答える第一歩が、展示品に付ける説明文で、キャプションは、その展示をした研究者あるいは学芸員の研究発表の場である。キャプションには、研究者、学芸員が署名するべきである。しかし展示を見た人の疑問は、その解説文を見ただけでは解決しない場合がある。いうなれば、より一層の疑問が出てくることがある。そのような一層の疑問に対して答える材料を与えるのが、図書室や学習室である。まず不思議だと思ったことをインターネット、辞書や百科事典で調べる。それでもなお疑問が解決しない場合は本を読む。その本も、新書版を読んで疑問が解決する場合もあるし、専門書を読む必要がある場合もある。

あるいはこれからは映像資料も必要となるであろう。

博物館は、展示を見て触発された好奇心のレベルに応じて、情報を提供する場でもあるべきである。その意味で、モノの展示は疑問の出発点で、その疑問に徹底的に付き合うのが「博情報館」である。本物を見てそのモノの持つ迫力に触発されて、知的好奇心が刺激される例として、国立民族学博物館が学校教育に協力してつくった「みんぱっく」を紹介する。小学校で国際理解教育にブータンのことを勉強しようとする場合、教師にはブータンに関する教材がない。そこで国立民族学博物館に連絡し、ブータンに関する資料を借りたいと申し出る。そうするとスーツケースに入った教材のバックが送られてくる。これを「みんぱっく」と呼んでいる。「みんぱっく」は、ブータンに対する子供たちの好奇心を触発する出張博物館の役割をはたしている。

これからのブータン・ミュージアムが、本物を展示する「博物館」だけに止まることなく、ブータンの文化についてのフォーラムの場として、多様な情報を提供する「博情報館」へと一層の発展をすることを期待したい。

# ブータンの国づくりに思う

(一材) 日本開発構想研究所研究主幹 梅田勝也

(ブータンの近代化・民主化と環境政策)

ブータンの近代化と民主化は、1952年即位の第3代国王と1974年即位の第4代国王により推進されてきた。歩みを牽引したのは、開明的な国王の存在もさることながら、中印という二大国に挟まれた地政学上の事情によるところも大きい。つとに知られるGNH(Gross National Happiness)をそういう文脈で捉えることもできる。GNHに通底するのが、ブータンの森林政策と自然保護政策である。国土の60%以上を森林として恒久的に維持することを1974年に森林政策として示し、後に憲法にも位置付けた。当初は外貨を稼ぐ貴重な資源としての森林利用という発想だったが、第4代国王は「地球環境＝持続可能な開発」という国際的な潮流を読み取り、伝統文化という価値観の下に森林政策を環境保護政策として再設計した。その意図は、国土の51%もの面積の自然保護区としての指定や「ブータンの人々から地球への贈り物」と呟かれたBiological Corridor(生態学的回廊)の先駆的实施に結びついている。その果実が国際的に一目置かれる地位であり、海外からの積極的な援助である。

(国づくりの難しさ)

昨年来JICA初の国土計画プロジェクトである「ブータン国土総合開発計画2030」Comprehensive National Development Plan 2030に取りかかっている。テーマは、総論的には大都市(首都ティンパー)と地方(東部等)の格差の是正であり、各論的には土地利用、交通基盤、産業振興、農村開発である。森林国で急流河川という共通項を持つ日本の「全総」経験を技術移転するという主旨だが、同じ山岳国と云ってもレベルが違う。ヒマ

ラヤ南面に位置するブータン国土の急峻さは格別であり、東西移動は等高線沿いに崖を削った1.5車線道路での峠越えの連続となる。未舗装区間も多く崖崩れによる不通も頻繁である。高速道路と新幹線を梃子にして国土開発をした日本とはあまりにも事情が異なる。

国土の利用に着目すると、ブータンで人が利用できる土地は国土の3%でしかなく、わが国より遥かに窮屈である。農地の多くは山の斜面地利用の棚田で機械化も難しい。都市と農業の土地利用の競合は必然だが、都市地域の明確な定義もまだ定まっていない。

一方、急峻な地形は水力発電に適し、インドへの売電収入が歳入の20%、電気の普及率99%という恵みもある。通信環境も整備され田舎でも衛星放送を普通に視聴でき、若者は皆iPhoneを操る。それが仇となる面もあり、若者は職を求め憧れもあって首都ティンパーを目指す。一極集中の進行と東西格差の拡大はより顕著となる。これからどのような国づくりが必要なのだろうか？

(これからの国づくり、地域づくり)

ブータンは2008年、第4代国王の主導の下に憲法を制定し立憲君主制の国家となった。憲法の内容もユニークだが制定のプロセスも興味深い。この10月に3度目の国民議会選挙(下院)が実施され日本の各紙も小さい記事だが「ブータンで政権交代」と報じた。前回選挙に続く政権交代である。ブータン国民が変化を求めているのだろうか？

政情不安の国・地域の多い南アジアで民主化を大きな混乱もなく成し遂げ、二大政党制の下で民主的な政権交代を行うブータン！憲法制定以降の

この10年は法令を整え議会政治の定着を図るための助走期間であり、これからが国づくりの正念場となる。地域づくりのための地方分権が十分でないのが少し気にかかるが、そう一足飛びにはいかない。



# 映画「ゲンボとタシの夢見るブータン」について

(原題：The Next Guardian,

2017年 ブータン・ハンガリー国際共同製作映画)

ブータンミュージアム賛助会員：奥村 陽子

ブータン人監督（共同監督）による、初めてのドキュメンタリー映画である。

ブータンの私設僧院チャカル・ラカンを舞台に、その僧院を守る一家と、その兄妹の姿を中心に描いている。兄のゲンボは16歳、妹のタシは15歳。ふたりともサッカーが大好きで、一緒にトレーニングに興じている。妹はナショナル・チームの選抜試験を受けるほど。その一方で、父親は守り継いできた僧院を、兄ゲンボに継いでもらいたいと考えていて、僧院での修業を一刻も早く受けさせたい、と焦っている。ゲンボ本人は、僧院行きにためらいを感じている。

妹のタシは自分を男だと思っているが、父親は「あの子の前世は男だった」とあっさり認めていて、自由にさせているようだ。だが、タシがサッカーの選抜試験に落ちたことで、娘の将来への不安を語る場面もある。

映画の中では細かい説明が一切なく、淡々と登場人物の表情を伝えていくが、それが見る私たちに自由な想像を許している。青空に映える山々やサッカー場の緑、ブータンの美しい自然とともに、チャム（祭りの踊り）の場面は色鮮やかでとても美しい。

父親が入念に手入れをする美しい仮面を見ると、この文化をいつまでも守ってほしいという願いも理解することができるし、父の意見に押しつぶされそうなゲンボを見ていると、自分の意志で進む道を決めることができればいいのに、とも思う。多くを語らないゲンボが、どんどん追い詰められていく表情が切ない。

父親の強い思いの一方で、僧院の見学する場面では、「今どき、僧になりたがる者なんか誰もいないですよ」と僧院の先生が語り、ゲンボは僧院のWi-Fi環境を気にする場面が、リアルで面白かった。

私がブータンを訪れてから10年以上経つが、急速な変化の波が押し寄せていることが映画から感じ取れた。それは街並みの風景だけでなく、家族のありかた、僧に対する意識の変化からも明示される。

この映画では「今」のブータンを映しながら、世界のどの国にもある普遍的な世代間ギャップを描いている。





(英語原文)

Review on 'The Next Guardian' -a documentary-



Sonam Choki

This documentary 'The Next Guardian' was shot in a small village called Chakhar in Bumthang valley of Bhutan. The setting of the documentary was in and around the temple. The father in the film is a caretaker/owner of the small temple at Chakhar. His main aim is to make his children capable of making their own livelihood once he departs his life. In addition to this, he wants his son to be the next caretaker.

The main characters involved in this film are two siblings called Tashi and Gyembo. Gyembo, the male attribute in this documentary, wants to continue his modern education in school however his father wants him to study in monastic body once he is well versed in English. The next Character Tashi, the younger sister of Gyembo, is masculine in nature and she always dresses up like a man. Both of them like exploring through social medias and online videos.

Both of the teenagers like soccer and moreover, Tashi, being an athletic girl, has a dream to be a member of the national soccer team however she has not fulfilled her dream yet.

The two siblings share a strong bond of love and care for each other. They stay very close and share every aspect of their lives. Gyembo is in dilemma whether he wants to become a monk or not and he discusses with his sister. His sister tells him that if he becomes a monk, he won't be able to keep 'dompa' -undefiled life. This shows how strong their bond is. Father teaches Gyembo prayers, how to do the rituals and what should be done as every day routines in the temple. Father stays at home, explaining religious stories when people visit their Lhakhang(temple), where his wife helps him.

As of now Gyembo is studying in Kelki higher secondary school and Tashi is selected as a member of a football club. Gyembo was given two more years to think about what he wants to become as Father isn't forcing him.

Suggestion

I would love to see Gyembo, as a monk, taking care of the heritage that his parents have inherited (as the caretaker of the temple). Father will be happy as well as their family. The Lhakhang is on a safer side as the government won't take that temple. I also respect the Gyembo's decision as the world is changing. There is a need of education in every field. If he takes care of the temple, he can explain about it to the tourists when asked, as well as he will be proud of.

※ソナム・チョキさんについて

現在、首都ティンプーにあるRTC (Royal Thimphu College) の3年生、平成30年1月から2月にかけて豪雪で白銀の福井に約1か月滞在。プータンミュージアムの広報に協力していただいております。

(和訳)

ドキュメンタリー映画「The Next Guardian」について

ソナム・チョキ

このドキュメンタリー映画「The Next Guardian」は、ブータンのブムタン村にあるチャカという名の小さな村で撮影されました。このドキュメンタリー映画のセッティングはあるお寺およびその周辺です。この映画の中の父親はチャカにある小さなお寺の住職です。彼の第一の目標は、万が一自分がこの世を去った後でも子供たちが生計を立てられるよう一人前にすることです。さらにつけ加えると、自分の息子に其のお寺の後を継いでほしいということです。

この映画の主人公はタシとゲンボという二人のこどもたちです。この映画の中で男の子のゲンボは学校で現代教育を引き続き受けたいと思っています。でも父親は英語力を十分つけたら、その後は僧院で勉強をしてほしいと思っています。もう一人の主人公であるゲンボの妹、タシは、男の子の性格で、いつも着るものは男の子のかっこをしています。二人ともソーシャルメディアやオンラインビデオをいろいろと見るのが好きです。10代の二人はともにサッカーが好きで、特にタシは運動の得意な女の子で、サッカーのナショナルチームの一員になる夢を持っています。でも彼女の夢はまだかなってはいません。

二人の兄妹は、深い愛の絆で結ばれており、お互いに相手を気遣っています。二人はいつも近くにおいて、人生のあらゆる側面を共に過ごしています。ゲンボは僧侶になりたいのか、なりたくないかで悩んでおり、妹と話し合いをします。彼女は兄に、もしもあなたが僧侶になっても、仏教の教えに従った清らかな生活は実践できないでしょうと言います。こうしたことは、彼らの絆がいかにか強いものかを示しています。父はゲンボに読経のしかたを教えたり、儀式をどのように執り行うか、また毎日の規則的なお勤めの中で何をどうなすべきかについてお寺で教えます。父は母も手助けしてくれているお寺にいつもいて、お寺に人々がお参りに来られると、父は宗教的なお話をします。

現時点では、ゲンボはケルキ・ハイアーセカンダリースクール（\*訳者注 高等学校レベル）で勉強しています。また、タシはあるサッカークラブのメンバーに選ばれています。ゲンボは、父が（訳者補足：息子の将来の進路について）強制はしていないので、今後自分が何になりたいのかを考えるため、さらに2年間の猶予をもらっています。

(感想) 私だったら、ゲンボが僧侶となって、彼の両親が代々管理を引き継いできたそのお寺という貴重な財産の世話をしてくれる姿を見たいと思います。そうになったら彼の家族同様、父も喜ぶでしょう。また、同時に私はゲンボの決定も尊重します。というのは世界は変化しつつあり、あらゆる分野で、例えばお寺の管理においてさえ教育の必要性が生じています。というのは観光客に質問されたとき（訳者補足：英語で？）お寺の説明をする必要があるからです。また、彼自身も自分に自信と誇りをもつことができます。

福井をもっと面白く  
ローカルの仕掛人。

People who work at the local



02

高野翔  
さん

JICA（国際協力機構）職員

JICAの職員としてブータンの国づくりに関わるプロジェクトに取り組んできた、福井出身の高野さん。  
地元・福井のまちづくりに取り組みながら、「幸せな社会」を追求している。



高野さんにとって2014年からの3年間、ブータン政府の人々とともに国づくりに奔走し過ごした時間はとても貴重な経験になったと言っています。

ブータンとの運命的な出会いは、2011年に起きた東日本大震災がきっかけだった。若きブータン国王が来日することが決まったのは、公的な仕事をしていた高野さんにとって、「どうすれば「幸せな社会」というものを目指せるのだろうか」と漠然とした不安を抱いていた時だった。

このとき高野さんは、ブータン国王が日本の国会で語った、人々の幸せを国として最も大事なものとするという国是(国の目標)のとてもシンプルな言葉に感銘を受けた。そして「自分もブータンの国づくりに関わりたい」という思いが膨らみ、ブータンへと渡った。

ブータンでは、首相や大臣などの政府関係者、各省庁の官僚たちと毎日のように対話を重ねながら、ブータンの国づくりの課題について議論する日々を過ごした。

そして日本で積み重ねてきた経験や技術を生かしながら、農業や地域の産業振興、社会基盤の整備など多種多様なプロジェクトを一緒に作り上げていった。

当時の高野さんにもっとも影響

## 「幸せな社会」の答えを求めてブータンへ

を与えたものが、ブータンの国の目標であるGNH(国民総幸福量: Gross National Happiness)という指標の存在だという。

GNHは前国王が「ブータンではGDP(国内総生産)よりもGNH(国民総幸福量)の方が大事だ」と発言したことが契機となって生まれ、以降、ブータンでは「金銭的・物質的豊かさだけを偏重して追求するのではなく、伝統的な社会や文化、環境などにも配慮し、国民一人一人の精神的な豊かさを重視する」というGNHの精神に基づいて、国の舵取りを行うことになった。

GNHでは政策として推進していくため、人々が幸せになれるために必要な9つの環境要因を定めている。精神的な幸せ、健康、時間の使い方、教育、文化の多様性、ガバナンスの質、地域コミュニティの活力、環境の多様性、生活水準の9つだ。

この9つの要素を等しく大切なこととして位置づけていて、バランスよく満たしている人はど幸せになりやすいと仮定している。国の指標として、生活水準と同じように、例えば時間の使い方や精神的な幸せを大事としている国は他にはなくユニークなケースとして輝きを放っている。

そしてブータン政府はこの9つの環境要因を指標として、人々の幸せを測る調査を全国で実施している。高野さんもまた、さまざまなプロジェクトを立ち上げていく上で、人々の幸せをつくっている要因や、人々が幸せになることを遠ざけている要因は何かを明らかにするため調査に協力し、同行して歩き回った。

調査は国全体の人口の1%にあたる約8000人を対象にし、対象者1人に対して148の幸せに関する質問を2時間ほどかけて丁寧に行っていた。

そして、この調査を通じて高野さん自身が気づいたのは「幸せは多様である」ということと、「幸せは身近なものである」ということだった。調査を始めた当初は、「ブータン独自の幸せになる生活習慣などを知ることができたらうれしい」といった気持ちがあったが、やがて「特別なことなんて何もなし」という結論にたどり着くことになった。「どういったときに幸せを感じますか?」という質問を投げかけると、ブータンの人々の口からは「親が健康であることが幸せ」、「子どもが無事に育ってくれていることが幸せ」、「近所の人々がたまに会いに来てお茶する時間が幸せ」といった、とても身近な内容の答えしか返っ



精神的な豊かさなどを大切にしているブータンの人たちとの交流や、GNH(国民総幸福量)を磨き出すブータンの国づくりに携わった経験は、高野さんが取り組む福祉のまちづくりの原点にもなっている

福井をもっと面白く

## ローカルの仕掛人。



### 〇〇 幸せのものさしを 自分の中に持つこと 〇〇

てこなかったのだ。

「日本人の場合、どちらかという  
と幸せは眉間にしわを寄せた大変  
な思いをして目標を達成すること  
で、ようやく手に入れられるもの、  
といった感覚があると思っています  
す」と高野さん。

「上を向いて歩こう」では、幸せ  
は雲の上にあると歌われています  
し、「三百六十五歩のマーチ」では  
「幸せは歩いてこない、だから歩いて  
行くんだね」と、幸せは遠くにあ  
るものとして歌われています」

高野さん自身も「幸せってなんだろ  
う、幸せな社会ってなんだろう」と  
という疑問の答えを求めてプータ  
ンに渡ったものの、幸福は自分の  
内側から生じるものであり、身近  
なものであることを実感。プータ  
ンのさまざまな場所を訪れ、うち  
いろな人とじっくり話をするうち  
に、あらためてそのことに気づき、  
はっとさせられたと言った。

「幸せのものさしを外に求めるの  
ではなく、自分自身にその幸せの  
中心点(評価軸)をもつことが何よ  
りも大事なことなんだと気づかさ  
れました」

偶然なのが、高野さんの故郷で  
ある福井も「全47都道府県幸福度ラ  
ンキング」で3回連続日本一になる  
など、幸せとはとても縁が深い場  
所だった。

ある時、高野さんはプータンの  
幸せの調査で測っているものと日  
本の幸福度ランキングで測ってい  
るものを比べる中で、面白いもの  
が見えてきたという。

例えばプータンの調査も日本の  
調査も「文化が大事」という点では  
同じように人々の幸せを構成する  
要因として文化を含んでいる。

プータンの調査では、文化の状  
況を調べるために、それぞれの個  
人がどのような手仕事の技術を  
持っているか、日々の生活でどれ  
だけ伝統的行事に参加できている  
かなどを調べている。

これに対して日本の調査の場合、  
教養や娯楽の支出額や書籍購入額  
などで文化の状況を測っている。

幸せについて考えるとき、自分  
という個人の軸と街などの総体と  
しての軸の2つの見方があり、  
プータンの方がより個人に焦点を  
あてていて、客観的なものはかり  
でなく主観的な幸福感を測るよう  
に試みている。

こうした傾向は文化以外の要因  
についても見つけた。例えば健康  
について測る時も、日本の場合  
はその地域の医者の数を測ること  
になるが、プータンの場合はその  
人が自分の健康状態をどのように  
認識しているか、などを調査して  
いる。



また調査の方法について、ブータンでは直接人に会いに行って幸せに関する質問を行っているが、日本の調査の場合、客観的データに基づいて計算している。

「そういうところから、もしかすると幸福度ランキングの結果に違和感を感じている人がいるかもしれません。それは自分自身の個としての主観的な幸福感が反映されてないからだと思います」と高野さんは考えている。

「ローカル」な場所での暮らしを楽しむための一番の方法は、自分の内側にある幸せを見つけてあげること。それにつぎくるんじゃないかなと思います」

地元福井でも仲間たちとともにまちづくりの活動を行い、2013年には福井の人たちの魅力を紹介する観光ガイドブック「Community Travel Guide 福井人」を作成した経験を持つ高野さんの言葉だ。

高野さんは「幸福度ランキング一位の福井だからこで、客観的な外のものさしを越えて、市民ひとりひとりが思い思いの幸せを表現できるまちづくりが理想」という思いを抱いている。

最近では、記録的な大雪による財政難で福井市の多くの事業が中止や縮減を余儀なくされる中、ま



## 「幸せの自給率」が 高い福井を目指して

ローカルの仕掛人。 People who work at the local

ちづくりの仲間たちと集まり、「できるフェス」という市民フェスを福井市中央公園で開催した。

自分たちや福井市民が好きなことや得意なことを持ち寄りながら、そうした事業を復活させてみようという試みだった。

例えば困難になった小学校プールの開放事業をみんなで家庭用プールを持ち寄って彩りあるプール空間をつくりだしたり、図書館入費が削減される中で本の交換市を開催してお気に入りの本を持ち寄り交換することで、たくさんの人と人との新しい出会いの場をつくってみたい。野外映画上映会やJAZZチャリティーコンサートなどのイベントも企画した。

たくさんの笑顔が見られた市民フェスに取り組む中、高野さんたちももっとも大切にしたいことは、自分たち自身の思いと行動。そしてひとりひとりの多様な幸せ感が社会をよくするエンジンになる、という思いだった。

「自分にとって幸せだな、好きだなと思うことを福井で表現してみることができる場や機会が増え、幸せが循環し、幸せの自給率の高い街ができあがっていくような気がしています」(高野さん)



### PROFILE

高野翔 1983年、福井県生まれ。大学院卒業後、2009年、JICA(国際協力機構)に入構し、これまでに約20ヶ国のアジア・アフリカ地域で持続可能な都市計画・開発プロジェクトを担当。直近(2014-2017)ではブータンにて人々の幸せを国とするGross National Happiness(GNH)を軸とした国づくりを展開。現在はブータン政府のGNH外部アドバイザーとしても活躍。地元福井でも仲間たちとまちづくりに関する活動を行い、2013年には福井の人の魅力を紹介する観光ガイドブック「Community Travel Guide 福井人」を作成、「グッドデザイン賞」を受賞している

1.記録的な大雪による影響で事業の中止、縮減が相次ぐ中で企画した「できるフェス」は、新しい視点と関係性が未来の可能性を生み出すモデルになるかもしれない。  
2.実施が困難になったプール開放事業を復活させる試みで、中央公園が子どもたちの笑顔であふれかえった「プールシェアコーナー」。  
3.福井の野外やまちなかでの映画文化を創り出す取り組み「野外映画上映会」は多くの人が作品に夢中になった

# 最近のクエンセルの記事から—そのV

ブータンミュージアム 奥村 彰二

## 第3次国民議会選挙の経緯

スタートから2期10年経過し、民主主義を成功させたブータンの第2次国民議会は、2018年8月1日、国民議会議場で繁栄と長寿を祈りながら解散した。この時点で、議会や政党関係者はもちろん、ほとんどのブータン国民はそれぞれの立場で、次期の国民議会議員選挙が国民にとっての一大事であると強く意識したと思われる。

8月17日に選挙管理委員会から、予備選挙は9月15日、総選挙は10月18日に行われることが発表された。

選挙法第189条によって、国民議会議員選挙は、予備選挙と総選挙の2回に分かれて行われることが規定されている。さらに、予備選挙で最も多い有効票数を獲得した登録政党と、次に最も多い有効投票総数を獲得した登録政党の2つの政党に、約一カ月後に実施される議会の議席を争う総選挙の候補者指名を行う資格が与えられると選挙法は規定している。

予備選挙では、登録されたすべての政党が参加して選挙を争う資格があるが、選挙委員会が予備選挙を行うことを宣言してから7日以内に、選挙戦に加わりようとする政党は、47選挙区のすべての候補者を登録しなければならない。なお、その候補者になるための資格の条件は、ブータン王国選挙法2008で規定されている。すなわち、a) ブータンの国籍を持っていること、b) 選挙区において、参政権を保持していること、c) 年齢が25歳以上で、65歳以下であること、d) 正式な大学を卒業していること、である。

各政党は8月22日から、予備選挙に向けた選挙運動を開始した。

予備選挙に正式に登録された政党は、次の4つの政党であった。これまで、政権与党であったPeople's Democratic Party (PDP: 国民民主党)、

2008年にスタートした第一次国民議会の与党で、第二次の議会で野党であったドゥク・ペンスム・ツォクパ (DPT: 調和党)、2013年の第2次国民議会選挙に際して結成され、これまで与党にも野党にもなったことがないドゥク・ニャムル・ツォクパ (DNT: 協同党)、2012年6月に政党として結成したが、前回の国民議会選挙で47名の候補者を揃えることができなかったブータン・クエン—ニャム党 (BKP: 平等党)。(以後この報告で、政党名をアルファベット3文字の略語を使う)

8月26日最初の公開党首討論会が開かれ、4つの政党それぞれの党首が、政党の主張を発表して討論を行った。また、9月2日には2回目の党首討論会が開かれ、この時は主に政党が発表しているマニフェストについて、それぞれの党の4人の代表者で討論が行われた。DNTからは、党の創設者のひとりが出て、それ以外の3党はそれぞれの副党首が党の代表として出席した。この2つの討論会における各党の主張を、クエンセルの記者がまとめたものが、それぞれの討論会の翌日に掲載された。

各党がそれぞれの主張、または発表されたその政党のマニフェストを一堂に会して討論し合う機会は、予備選挙とその後の総選挙を通してこの2度の討論会の他にはなく、その内容を詳しく検討する必要があるが、記事として長くなるので割愛したい。(ブータンミュージアムのホームページには、クエンセルの記事として紹介している)

## 予備選挙の選挙結果

予備選挙の投票が9月15日に行われ、選挙管理委員会は、その一週間ほど前から行われていた郵便による投票と合わせて、翌日にはその得票集計結果を発表した。

47の選挙区毎に、獲得票数の一番多い政党の色でその選挙区を塗った地図を図1に示す。この選挙の各政党の全獲得票数によって、その上位2つの政党、DNTとDPTが次の総選挙に臨むことに決められた。すなわち、この2の政党のうち、どちらか一つが次期国会で政権与党に、他の政党が野党となることが決められた。これまでの与党であるPDPは予備選挙で3位の得票しか得られなかったため、この時点で次期国民議会の議員として参加する政党から外れ、政権交代が起こることが決まった。

なお、この選挙の有権者総数が、438,663であり、投票総数が291,098で、投票率は66.38%であった。BKPはその得票数が全投票数の10%にわずかに足りず、次期選挙に出るとき、公的な選挙資金が得られなくなった。

## 第3次国民議会総選挙の結果

予備選挙終了の9月22日から10月16日まで、2つの政党による最終的な総選挙に向けた選挙運動が行われた。全国の47選挙区において、2つの政党から一人ずつ候補者を立てての争いである。

9月25日から10月10日までの期間で公開演説集会が行われた。しかし、この2党の1対1の公開討論会は行われなかったようで、9月29日付けのクエンセルで、2つの党首の間の議論が掲載された。そこではDNT党首は、選挙中に相手の党DPTのマニフェストについて、批判はしないなどと述べ、さらに、自分の党の主張は既に国民に伝えてあるので、これからは国民がどちらの党がいいか選ぶときであると、政党間の選挙戦は終わったかのような発言をしている。

以下で示すように実際の選挙では、DNTが、一方的とは言えないまでも、当選議員数で30:17の完勝であった。これまでの5年間の国民議会では、議会外でしか活動できなかった政党が、第一次議会では政権与党で、第二次議会では野党であったDPTに勝利したのであるから、国民の支持を得るために他党と違ったどんな政策を

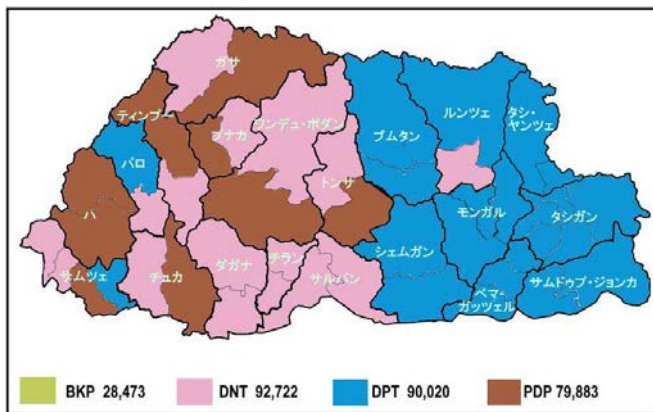


図1. 予備選挙政党別総得票数、各選挙区の色は最も多く得票した政党を示す。



訴えたのだろうか」と、振り返らざるを得ない。予備選で敗北した2つの政党も含めて、現在のブータンの貿易赤字の増大や相次ぐ大型水力発電プロジェクトの完成の遅れなどに起因する政府の財政問題、若者の失業問題、政治腐敗と国民の貧富の格差、教育分野でのセントラルスクールへの移行における積み残し問題、地方分権の更なる発展などについては、どの党も共通にその重要性を認識しており、問題の取り組みの際の財政負担をどのように評価するかの違いで、その党の政策のトーンが違ってくると見える。

このような状況の中で、DNTが特に際立って強く主張したことは、富裕層の人と貧困層の人との間の格差を縮めることであった。また、党首のロテイ・ツェリン氏自身が医師であることもあり、国内の医療施設の実態に詳しく、国民の健康、あるいは医療の問題が党の最優先の課題であると表明した。農村地域での公立の医療サービスにおける不平等性を無くすこと、公務員の給料・各種手当・年金等の改善、出産手当の増額、政治腐敗などの問題を、国民の格差是正の方針の各論として扱おうとしていた。

また、党独特の主張として、クラス10の学生全員に課している国の学力試験の廃止を訴えた。この試験は、公立学校のクラス11に進級できない学生として、振るい落とすことに使われているので、この試験を廃止して、学生が進学を希望すれば、貧しい世帯の子供であっても、クラス12(高校の最終学年に相当)まで進級できるようにしている。なお、クラス12まで、国家は無償教育を提供すべきだと、合わせて主張している。

ブータンの外からこの総選挙の状況を見ると、一見これまで与党でも野党でもなかった新たな政党が、選挙が始まるや急に頭角を現わしてきたかのように思われるが、DNTは過去5年間、PDPが政権を担っている間、次期選挙では政治

の表舞台に立とうと、国民へ党の浸透を図る活動を熱心に行い、着実に総選挙準備を行ってきた。党員数は、2013年では135人であったが、今年には11,000人までに成長し、選挙前のDPTの総会員数4,705人を、大きく上回っていた。

10月18日に総選挙の投票が行われ、選挙の翌日にはブータン選挙管理委員会から結果が発表された。クエンセルオンラインにその結果をまとめたものが掲載され、その当選者の政党の分布状況を図に示したものを下に示す。結果として、ドゥク・ニヤムル・ツォクパ(DNT:協同党)が30議席、ドゥク・ペンスム・ツォクパ(DPT:調和党)が17議席を獲得した。この結果、これからの5年間、DNTが政権与党となり、DPTは野党にまわることになった。

図2に各選挙区で当選した候補者の政党を示した地図を示した。

10月20日にブータン選挙管理委員会から発表された今回の国民議会選挙の講評が、クエンセルの記事として発表された。その記事をそのまま、最後に付けた。

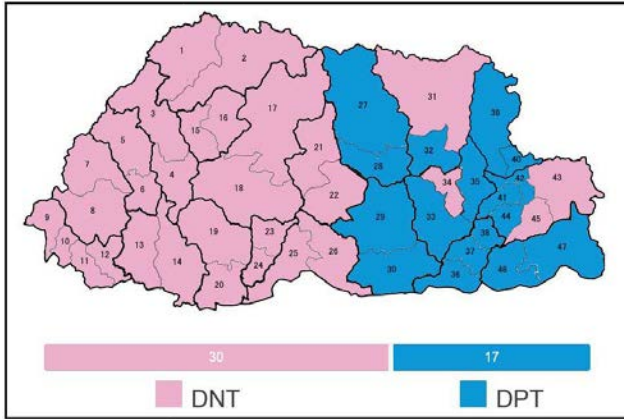


図2. 国民議会総選挙政党別当選者数、各選挙区の色は当選者の政党を示す。

## DNTは全投票数の54%を得る

(2018年10月20日 トップ記事、NA選挙)  
 ブータン選挙管理委員会(ECB)は、昨日、30の選挙区で勝利したドゥク・ニャムル・ツォクパ(DNT:協同党)を第3次政府として正式に宣言した。17の選挙区を獲得したドゥク・プエンスム・ツォクパ(DPT:調和党)は、野党として宣言された。委員会の本部で行われた記者会見で、47の選挙区から選出された候補者の名前も公式発表された。

当選した47人のうち、7人が女性候補者である。これはこれまでに選出された女性候補の中で最も多い数である。過去2回の選挙においては、毎回4人の女性候補者が国会に選出された。2008年には、DPTの女性候補4名がすべて選出された。2013年には、PDPの候補者3名とDPT候補者1名が選出された。

47人の選出メンバーのうち、1人は博士、26人は修士、残りは学士の称号を保持している。年齢については、20代が1名、30代は14名、50代は13名、60代は2名である。

ECBには、総選挙に関して合計21件の訴えが発生し、そのうち14件はソーシャルメディアに関連したものであり、すべての論争や苦情は、選挙期間に解決したとECBは発表した。

「前例のないソーシャルメディアの利用は、ソーシャルメディアに一方的、または他の形に関連した論争や異議申し立ての件数において、圧倒的な割合を占めている」と、記者発表で述べられた。

7件の事案は根拠のないものとして却下され、4件は48時間の非選挙運動期間中に受け取られたと述べられた。

メディア調停者の事務所はソーシャルメディアに関連する9件の苦情を受け、そのうちの8件が調査されて委員会に回され、1件が却下された。

メディア調停者は、抗議として28件のFacebookの投稿があったが、そのうち4件は書き込んだユーザーが削除し、6件はFacebookの当局によって削除された。ECBの記者発表によれば、「メディア調停者から繰り返し要請があったにもかかわらず、Facebook当局は18件については削除しなかった」と述べた。

総選挙では、20人のソーシャルメディアの

監視者が47の選挙区で189のウィーチャット(WeChat)のグループを毎日監視していたと述べた。

ECBは、投票日は何の問題も起きなかったと述べた。「いずれの投票所でも電子投票機(EVM)に関しては何の事故も報告されていない」と述べた。

合計313,473人の有権者(159,319人の女性と154,154人の男性)は、47の選挙区で候補者の投票を行い、全体の投票率は71.46%であった。

総投票数のうち865カ所の投票所におけるEVM(電子投票機)で199,553票が、郵便投票で113,920票が直接投票された。

チョグヤ・ダゴ・リグゼン選挙管理委員長は、

郵便投票総数の約1%の797票の郵便投票を無効としなければならなかったと述べた。

記者発表によると、郵便投票の無効票の44%は、投票用紙に印がつけられていないか、適切に印が記入されていないことが主な理由で、31%はVPIC(有権者個人写真証明書)が間違っているもの、25%はAまたはBの空の封書であるか、無資格の証拠のあるものである。

選挙の申請期間は、昨日開始され、11月6日午後4時に終了する。(原文ママ)

タシ・デマ

# ブータン人とのおしゃべりサロン（第14回）

## テーマ：ブータン人の幸せ

ブータンミュージアム事務局

### 内容概略

開催日時： H30年11月18日（日）晴れ 13：30～15：00

参加者：ウゲン・ドルジ（ゲストスピーカー）さん以下、約20名

今回は、紅葉の美しい秋晴れの下、ブータンの幸せや生活をテーマに、約20名の参加者で活発な意見交換ができ、大変盛況でした。来日されるまでブータンで高校の先生をしておられ、現在は県内の教職大学院で教科指導法を研修中のドルジさんは、この難しいテーマについて事前に準備され、大変、誠実にお話しいただきました。参加者も大変興味深そうにメモを取りながら、話に耳を傾けておられました。

#### ドルジさんより紹介スピーチ：

データの、ブータンは近隣の国（インド、ネパール、バングラデシュ、ミャンマーなど）と比べて、国民1人当たりGDP（国内総生産）は高いと言われています。インドにはもちろん大金持ちもたくさんいますが、平均するとブータンより低いのです。また、ブータンでは医療費、教育費が無料となっており、戦争もなく、一旦仕事に就けば安定した収入が得られ、犯罪もそれほど多くなく、比較的安心した生活が送れます。人々はあまり心配することがなく、一定の収入があり、安心して家族と暮らせる環境にいると幸せを感じることが出来ると思います。

ブータン人の幸せと経済事情についてですが、都市部と農村部ではかなり違っている部分があるので分けて紹介していきたいと思います。

#### 都市部：

都市部の人々の多くは月収制のサラリーマンです。夫婦共働きの家庭も多く、安定した収入が得られます。彼らの出費は大体、家賃・家のローン返済：20～25%、光熱費：10～15%、食費：20～25%、日用品：20%、車のローン返済：10%、宗教行事・交際費：10～25%程度です。夫婦共働きの場合は余裕があり、奥さんの収入の殆どを貯蓄や不動産購入など資産形成にまわしたりする人もいますが、ブータン人は教育費、医療費が無料なので将来の出費に対して貯蓄するという意識をもつ人はまれで、殆どの人は稼いだお金を楽しく使います。貯蓄は田舎にいる両親の巡礼の旅費や実家での法事のために使う人も多いです。ブータンは日本と違って家がかかなり広いので、あまり必要性がない家具を買うこともよくあります。

## 農村部：

農村部では老人が多いです。農村部の人々は、地域のコミュニティーの共同作業で農業を営んでおり、毎年同じ時期に同じ作物を同じサイクルで同じ人々と協力して収穫し、販売して収入を得ているので、よほどの天候不良がおきない限り、ある程度、安定した収入を得ることができます。食費は殆ど自給自足ですし、教育費、医療費は無料なので、作物を販売した現金収入を使用する目的は主に、地域の宗教行事や親の巡礼の費用に使います。ツェチュなどに着る女性用民族衣装（キラ）は高いものになると月収の3～4倍にもなりますが、女性は年に1、2回しか着ないのに毎回違うキラを着たいという人もいて、それがかなりの出費になります。男性はだいたい1着、一張羅のゴ（男性用民族衣装）があればよいという人が殆どです。

以下は、スピーカー個人およびその妻の私見にはなりますが・・・

都市部の男性が欲しがるとは、1車                    2家                    3不動産  
女性が欲しがるとは 1宝石                    2洋服・キラ       3車や土地

農村部の人が欲しがるとは、 1巡礼の旅費 2農作業用トラック 3携帯電話  
であり、女性の場合は祭りの日に着る一張羅のキラなどが考えられます。

若者の場合は、 1携帯電話       2衣服               3恋人       などが考えられます。

## 参加者との主な Q & A

Q・日本では、幸せになりたかったらたくさん働いてたくさん稼ぎなさいと教育を受けますが、ブータンでは学校教育の中でどのように指導するのですか？

A・ブータンでも教師としてはやはり、いい仕事に就くために、しっかり勉強していい成績をとって、大学にいけるようにがんばりなさいと励ましています。（大学無料は成績優秀者のみ）

Q・ブータンでは離婚や不倫などは多いですか？

A・他の国がどのような状況なのか分からないので答えるのが難しいですが、インドと比べるとはるかに多いと思います。インドでは一度結婚するとほぼ離婚しない社会ですので。ブータンでは結婚も簡単に出来ますが、離婚も同じくらい簡単に出来ますし、離婚に対する社会の圧力や偏見もあまりありません。

Q・ブータンでは共働きも多いということですが、男性と女性の家事の分担はどのようになっているのですか？

A・ブータンでは男性も女性も全く関係なく普通に家事を担います。男性も普通に台所で料理を作ったり、子供の世話をしたりします。手が空いている方が必要に応じて動くという感じです。



Q・ブータンでは介護施設などはないと聞きましたが、祖父母世代の世話、介護などはどのように担っているのですか？

A・確かにブータンでは介護施設や老人ホームなどという施設はありません。ただ、日本のように寝たきりの老人は余り見かけません。元気に歩いているか、亡くなっていないかのどちらかだと思います。病院は無料ですが、延命治療や高度な医療を受けられる病院は大きな都市部にしかないので、地方では BHU (Basic Health Unit) という保健所のような施設で薬を処方されたり、簡単な治療しか受けられなかったりします。ですから、ベッドに寝たきりとか、介護を必要とする老人はあまり見かけません。(ブータンの平均寿命は男性 68~70 歳、女性 71 ~ 72 歳、日本の平均寿命は男性 81 歳、女性 87 歳)

(以下は、その他についての Q & A)

Q・先月ブータンの総選挙があり、与党が変わりました。今回の選挙は SNS の影響が大きく、不正な SNS による情報操作があったと裁判所に訴えているケースもあるようです。ブータンでの SNS による選挙への影響についてどう思いますか？

A・ブータンは携帯電話の普及率も高く、小さな国ですので、些細な投稿でも一気に全国民に広がってしまいます。ですから SNS の投稿による選挙への影響は本当に大きいと思います。ブータンでは今では都市部、農村部に関わらず携帯電話が生活に不可欠なものとなっています。例えば農村部では共同で農作業をしたり、都市部でも宗教活動をしたりしますが、それらの連絡や問い合わせのやり取りも Wechat(日本で言う LINE) や Facebook を使って行われたりしています。

Q・ユニセフが 2 年ほど前に、ブータンの教員の英語力が低下しているとのデータを発表し、ブータン政府が去年、全教員に対して英語の研修を強化すると発表していました。実際どのように実施されているのでしょうか？

A・一昨年から政府はそれ以前と比べて教員の研修予算を 2 倍から 3 倍に増やしています。そして、一昨年は教育指導についての研修、昨年は英語力向上の研修を全教員に受講義務を課して実施しました。

## 《ブータンの一口メモ》

ブータンミュージアム事務局

### ラヤツパの帽子

ブータンの北部、中国国境沿いの山脈の麓(標高3800m)にラヤ村があります。チベットの影響が強く、ブータンの中では独特の文化を持つ少数民族(ラヤツパという)の村です。村人は夏は高地へ、冬はプナカ(南)に降りてくるという遊牧生活を送っています。



特徴の一つは、色とりどりのビーズを付けた巧みに編みこまれた細い竹細工の帽子をかぶることです。また、彼らは一般のブータン人とは異なる、ヤクの毛などで織った厚手の上着やスカートなど独自の民族衣装を着ています。それは自分達の民族の繋がりを示す意識の表れでしょうか。

しかし近年、竹細工の帽子をかぶるのはお祭りの時のみになり、作り手も年々減って、村でこの帽子を作れるのは2人くらいになっているそうです。作り手のひとりは「ユニークな工芸品は、観光客や外部からここに来た人達を魅了する唯一のものである。このユニークさを保つことが出来なければ、私達を訪れる人は無くなるでしょう」と言っています。

急速に発展するブータンの近代化のなかで、この帽子のような手づくり工芸の美しさが消えていくのは残念なことです。時代と共に変化する人々の意識を少し垣間見た気がします。ブータン国は伝統文化保存を国策に掲げていますので、是非後世にまで引き継いでほしいものです。(ブータンクエンセル記事参照)



ラヤの衣装を着た女性



ラヤツパの帽子



ラヤの少女

「聖地 アヌラーダプラ」  
1982年ユネスコの世界遺産登録  
その中でもシンボルとしての  
ルワンウェリ・サーヤ大塔  
純白の仏塔、高さ5.5m  
巡礼の人波は途絶えず

スリランカの仏教徒70%  
その歴史の厚さと深さに  
足元を振り返る旅の一時

# アジアの 村を歩く

## 19 祈りの島スリランカ

### 聖地 アヌラーダプラ



手を合わせる、ひざまずく、頭を垂れる、内なる声を聴く



写真・文 松田宗一  
(写真家・福井県大野市在住)

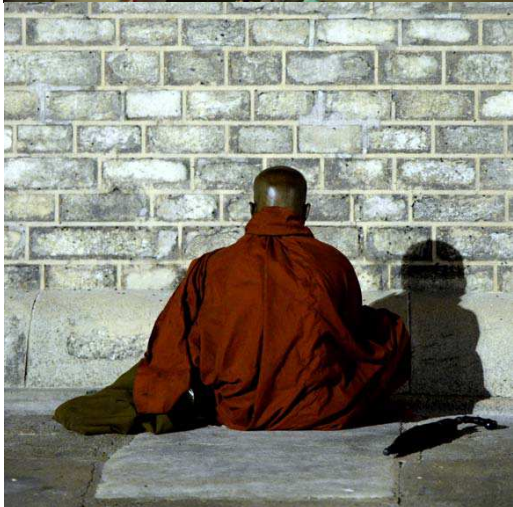


敷地内はいたるところが祈りの場  
雑する礼拝所を避けて  
思い思いの場所で  
自分の空間を持つ





ルワンウェリ・サーヤ大塔



大塔の壁に向かい祈る

太鼓を先頭に松明を持つ  
女性たちが続く  
賑やかさはなく静寂な  
時が流れる  
祈りへの思い、様々な形  
祈る人々の距離感はない





# 編集後記

新年明けましておめでとうございます。

平成最後ということで、普段よりも気持ちが引き締まるようなお正月でした。ブータンミュージアムのある福井県福井市は雪もなく天候に恵まれて、初詣にも気分が入りました。皆様のお住まいの地域はいかがでしたか？

さて、今年は亥（イノシシ）年。ブータンにも日本と同じく干支があるのをご存知でしょうか？並びも同じ、巡りも同じです。ただ、亥（イノシシ）は野ブタに変わると聞きました。ブータンではイノシシより野ブタの方が身近なんでしょうか。ブータンミュージアムには十二支の仮面の展示がありますが、見た目ではイノシシなのか野ブタなのか分かりません。ひょっとしたらイノシシと野ブタは同じもの…？と思って調べてみたら、イノシシを家畜化したものがブタで、家畜のブタが野生化したものが野ブタとのこと。結論としては、イノシシと野ブタのルーツは同じ、ということが分かりました。資料によってはイノシシと書いてあったりブタと書いてあったり、イマイチどちらなのか断定し兼ねるため、

ブータンの方に直接確認することいたします。結果は次号の編集後記にてお知らせいたしますね。

ちなみに2019年は「雌の大地の野ブタ」の年。ブータンの干支には雌雄と、火・大地・鉄・水・樹の属性があります。ブータン製のカレンダーをよく見てみると、雌雄と属性、干支がきちんと書かれています。ちなみにまったく同じ雌雄、属性、干支が巡ってくるのは60年後。いわゆる選暦です。

ちなみにブータンでは、1月1日は特にお祝いする日ではないそうです。どちらかという、気分が入るのは2月の旧正月だとか。そこはちょっと違うんですね。

今年が皆様にとって、素晴らしい年になるようお祈りいたします。

本来、このブータンミュージアム通信は2018年末に発行される予定でした。編集が遅れましたことをここにお詫びいたします。今年もブータンミュージアムの応援をよろしくお願いいたします。

（ブータンミュージアム 事務局 河崎英代）

【発行日】 2019年2月1日

【発行元】

特例認定特定非営利活動法人 **幸福の国**

〒910-0005 福井県福井市大手3-15-12

ブータンミュージアム内

TEL.0776-22-0011 FAX.0776-22-0010

ホームページ <http://bhutan-npo.asia/>

Eメール [info@bhutan-npo.asia](mailto:info@bhutan-npo.asia)

## ブータンミュージアム

【定休日】 毎週月曜日〔開館時間〕 AM11:00～PM5:00



J R 福井駅から徒歩約10分